

目 次

- 今日の日本経済の課題を考える糧として
～私と経済学とのかかわりにおいて～ 丹羽重省 (1)
- 「内容は自由」 今井勝行 (4)
- 新規受入図書案内 (1996年4月～1996年8月受入分) (6)

今日の日本経済の 課題を考える糧として

～私と経済学とのかかわりにおいて～

丹羽重省

はじめに

われわれは、今日の日本経済の転換期にあつて折に触れ、その将来を考えることが多い。それは、われわれの将来の生活を方向づけ決定するからである。今年の経済白書は、副題として「改革が展望を切り開く」のテーマで論じている。経済白書は、テーマのごとく日本経済の不況を打破するため、効率の悪い産業部門の生産性を引き上げる改革をすることが望ましいと主張している。官庁が改革を主張するのは珍しいことであるが、それほど日本経済は今日大きな課題を抱えている。

現在の日本経済に対しては、経済白書ばかりでなく、円高とグローバリゼーションのなかでその行方についてのいろいろの論議がましい。その将来に対する楽観論とか、悲観論など種々様々に交錯している。その議論について大別すれば、一つは日本の経済はバブル経済の崩壊を乗り越えて一層その発展を遂げ、国際社会のなかで重要な役割を果たすであろうというものである。もう一つは、日本の経済はバブル経済を頂点として円高の重圧をはねのけることができず、産業の空洞化が進行し、並の国以上の存在となることはでき

ないであろうというものである。こうした論議がしきりに行われるのも、われわれが今日まで経験したことのない前人未踏の日本経済の転換期にあるからである。それは、日本経済が明治・大正・昭和と貿易立国として輸出第一主義をとり、原材料を輸入して、完成品を輸出するという伝統的な考え方に軌道修正を迫るような国際社会の重圧が大きくなってきたこと、また今日バブル経済の崩壊と大型不況のなかで、かつての日本経済の特徴といわれた様々なシステムが変化の兆候を示し、その方向性が未だ見えないところにあるからである。

その意味では、われわれは予想以上に深い課題を抱え込み、方向の見定め難い時代に生きているといえるかもしれない。しかし、一方でぼんやりとしているが、日本の今後の進むべき道が、国際社会といかに関わるかが重要であることに気づいています。他方で成熟化した経済のもとでグルメに走り、自分の身をブランドもので固めているように、われわれの身の回りには豊富な商品が満ちあふれている。われわれは、一見豊かさを満喫しているように見える。というのもわれわれは、物質的豊穡さに囲まれながら、心の中に未だ何か満たされないという空洞感を感じているのが、今日の日本人の意識ではないだろうか。なかには、いやまだ十分物質的な豊かさも感じていないという人もあるだろう。それは、その通りであると思う。バブル経済崩壊以降、経済格差はいうまでもなく社会の様々な矛盾が一段と顕在化してきたことも指摘されるで

あろう。

なぜこのような課題を日本経済は、抱え込んだのであろう。日本経済の抱え込んでいる問題は、極めて多様でなにが経済ないし経済学の本質的問題なのか、われわれ自身とらえ難くしている。そうだとすれば、これから経済学を学ぶ初学生にはなおさら難しくなっているのではないかと思う。この点をいささかなりとも考える手掛かりとなるかどうか、大それたことは言えないが、私なりにこれまで歩んできた道と経済学とのかかわりを振り返ってみることにしたい。

(一)

皆さんよりも先に経済学を学んできたものとして、私が生きてきた時代がどのような時代であったか、そして私が経済学などの学問にどのようにして接したか、その一端を振り返ってみることで皆さんが経済学を考えるきっかけとなれば幸いである。

私が生まれた時は、太平洋戦争が勃発した前年（昭和15年）でした。私の幼児期でもある戦争末期（昭和19年）には母の実家に疎開したこと、名古屋の空襲で夜空が火災で赤く照り映えていたことを今でも覚えています。戦争が終わって昭和22年小学生になりました。われわれの子供の頃は、物はなにもかも不足した時代でした。着るものと言えば、衣料が不足していたために上着の肘やズボンの膝は、大きな穴が開いていました。それを母が布を当てて縫った物を着ていました。食物といえば、おやつはいつも蒸かしたサツマイモでした。それ以外にお菓子という物はアメだとかセンベイとかの駄菓子程度のものでした。今のサツマイモは、味の良い美味しいイモですが、当時のサツマイモは、水っぽくて、しかも食料事情も悪かったので大きくて不味いが、腹だけは満腹になるというものでした。そのせいもあって私は、最近に至るまでサツマイモ嫌いでした。

そのようなモノ不足は、建物の不足はもちろん、様々な教育施設（図書館、プールなど）、レジャー施設などあらゆるモノが不足していました。しかし、われわれにとって今と違って豊かであったのは、ありあまる自然環境そのものでした。その豊かな自然がわれわれを

培ったといっても過言ではありません。学校から帰ると、今の子供とは違って鞆を家に放り出して、すぐに外へ遊びに出掛けました。他の子供も同様に日の暮れるまで友達と遊んでいました。休みなどは、日なが川とか、寺や森に出掛け魚を捕ったり、蟬や虫取りに出掛けました。その頃の生活レベルは、今のように家電製品はなく唯一娯楽などの家電製品といえば、ラジオだけでした。皆が貧乏神と隣り合わせの時代であったということになるでしょう。その頃お金持ちのことを百万長者と呼んでいました。今のお金の価値でいえば、想像を超えるほど小さなモノでした。自動車に乗れるのは、よほどの金持ちでなければ手の届かないモノでした。今のようにも余りの時代からは想像ができない状態でした。私の町（春日井市）などはほとんどが田園で、今のようなビルらしいビルは皆無でした。

(二)

戦後われわれが享受したもう一つのものは、民主主義でした。それを大げさにいえば、政治の分野はもちろんですが、経済の分野でも財閥解体とか、農地解放とか、労働改革という形で行われました。私の町でも小作制度がなくなり、小作人をしてた人も自作農になったのです。これは日本の資本主義が発展するのに大きな役割を果たしたと考えられます。本年亡くなった大塚久雄氏や丸山眞男氏は、戦後の日本の民主主義の発展に貢献した学者たちでした。業績をあげられた分野は、前者は西洋経済史、後者は政治学です。大塚久雄氏は、資本主義は国家や官吏が作ったものではなく、中産生産者層の民が作ったものだといっています。丸山氏は、戦前の国家主義について書いていますが、そこで日本の独特の国家主義の本質を抽出しています。それはいかに民主主義とほど遠いものであったかを明らかにしています。

戦後から今日の日本の産業発展はすばらしいものでした。私の高校時代の先生のなかには、日本の自動車生産は、アメリカの自動車製造技術を乗り越えることは出来ないだろうといっていました。これに近いことを中山巖氏は『日本経済の歴史的転換』（東洋経済新報社P. 80）において次のように述べていま

す。「日本にはほとんど高速道路ができていなかったこともあって、この当時の日本車の高速性能は競合他社に比べてはつきりと劣っていた。ドイツ車などはアウトバーンで鍛えられているので、時速200キロを出してもびくともしない。BMWなどは高速になればなるほどかえって車体が地面に吸いつくような見事な走りを見せるのに、我が日本車は120キロも出すと、後ろの窓ガラスがブルブルと振動して、バックミラーでみる後方の景色がはつきりとみえないほどであった。また、長い上り坂では、アクセルを床一杯に踏み込んでも巡航速度100キロを維持できなかった。当時の輸入車ベストセラー車であったビートル（フォルクスワーゲン）にどンドン後ろから追い抜かれたことを覚えている。」

それはアメリカの鉄鋼業、化学工業についての見方もそうでした。その意味でアメリカの1950年代は黄金の時代であり、日本人のわれわれにとってジープを走らせチューインガムやチョコレートを振りまいていたアメリカ人は大きな存在であり、いかに日本人が小さく見えたことであろう。政治家などは、政権がかわる度にアメリカに出掛け、そのお墨付きをもらい、何らかの土産をもらって来るというのが日本の姿勢でした。このような落差こそが日本人をして欧米の先進国に追いつけ追い越せという精神を養ったのです。

(三)

私が大学に入った頃は、丁度1960年の安保改定の年でした。大学に入学した途端安保闘争の波に呑み込まれてしまいました。私は生来ノンポリ学生でしたが、激しいデモの行進の列にありました。闘争の頂点の時期には、あの名古屋の栄から名古屋駅にかけてデモのジグザグ行進でいっぱいとなりました。今からみても、あのような闘争の盛り上がりは、戦後から今日にかけてもみることはできないでしょう。同年6月に安保が改定されると、この闘争は潮が引くようになくなり、高度成長に入っていったのです。この時多くの日本人は、日本の将来をどう考えていたのでしょうか。安保問題をとことん考えるよりは、われわれを含めて大方の人々は、ただただ物質的に豊かになることが先決問題だと考えてい

たのではないだろうか。

私が大学に入る頃の日本は、敗戦による経済の壊滅状態から立ち直り、経済成長の基盤ができた時代でした。個々人にとっては、何もかもが不足した状態で自分の身の回りを充足させることと自国の経済発展が中心的課題で、対外関係をどう築き国際社会でどのような役割を果たすかなどは、想像を超えた領域でした。それでも経済の問題として最も重大で本質的問題であったのは、アメリカのカサのもとで資本主義を発展させるか、自立した資本主義として平和国家として発展を遂げるかという問題でした。しかもそれは資本主義と社会主義の対立という冷戦下での日本の行き方の選択でした。安保闘争が激しく燃えさかったのは、背後にその問題があったからです。まさに1960年代初頭は政治経済の季節だったのです。その影響からか私の高校時代すら、社会主義に関する本を思わず知らず読んで資本主義について懐疑の念をしばしば持ったものでした。しかし、当時の安保論議は真に国際的視野において論争が行われていたのでしょうか。それは、結局は日米間の問題領域をでるものではなかったのではないかと思う。というのも安保が改定されると、われわれを含めた日本人は、経済の領域にのみ関心が移っていったのである。

大学の講義で最も印象に残ったものは、村松恒一朗先生の西洋経済史でした。その講義は、通年ものでしたが、途中で先生が病気になられ前期も2、3週の講義をもたれただけで交代されたのが残念でしたが、印象の強いものでした。最初の講義で西洋と東洋の違いを講義されたものでした。それは西洋の庭にある噴水と東洋の庭園の違いを論じたものでした。西洋と東洋の本質的な違いをわれわれの身近なところの事例をあげて説くものでした。それまで受験勉強で歴史を学んだものは、いつどこで何があったかの程度でそれ以上に踏み込んで人間のものの考え方まで突っ込んで考えてきたことはなかったのです。その意味で極めて新鮮さを感じたものでした。

大学も学年が上がると、社会科学の方法論にも興味が行きました。その頃マルクス主義について大いに関心をもちました。それは安保闘争の影響もありましたが、アメリカのベ

トナム戦争への介入が深まっていく頃でした。東西冷戦の最も奇烈な時でした。アメリカではドミノ理論が影響をもっていました。ドミノ理論というのは、ベトナムが社会主義化すれば、一列に並べた積み木を一押しすると、連続して倒れていくように、ベトナムが社会主義になれば、東南アジアないしアジア全域が社会主義化するというものでした。それはまた核戦争による世界戦争の恐怖を煽っていました。当時はソ連・中国の社会主義の強固さが世界に大きな影響を与えていた時代でした。自ずからマルクス主義に関心が向いた時代でした。当時のアメリカ大統領は、ケネディでした。今でこそケネディはアメリカの黄金時代を象徴する伝説中の偉大な大統領ですが、当時は若さゆえに冷戦の厳しさに苦悩に打ちひしがれている大統領の姿が印象的でした。社会主義の強さに対して、ドル防御に象徴される資本主義の弱さが目に付いたものでした。今日からすれば、想像できないことですが、実際には社会主義経済の内部も火の車でした。

この60年代前半から後半にかけて日本は、高度成長の時代に入っていました。まさに経済の時代であり、私の学生時代は高度成長の時代の最中にあつたわけですね。その当時は、ケインズ経済学や経済成長論がもてはやされていました。その一方でインフレーションも大きな問題でした。

大学での演習は、金融論を選択しました。これをきっかけとして金融論を専門に学び、今日に至っています。その時時事的問題として関心をもったのは、インフレーションでした。インフレーションが貨幣現象であることを理解することに苦労したことを覚えています。また経済成長とインフレーションが極めてかわりが深いことも事実です。このことは別の機会があれば、触れたいと思います。

(四)

今日の日本は、経済成長によって欧米先進国に追いつくことができました。しかし最初に述べたように日本は今日いろいろな課題を抱え込んでいます。一つは戦後民主主義は今日の日本に本当に根付いたのであろうかという疑問である。そのことは、今日世界的傾向として市場経済化が進んでいるが、日本はそ

の最先端にたっているといえるでしょうか、決してそうではありません。日本経済の様々なシステムが不透明であると外国から指摘されているのは、そのようなことと関係があるといえます。先に挙げた丸山眞男氏の『増補版 現在政治の思想と行動』（未来社）所載の「超国家主義の論理と心理」にあるタテ社会の構図（社会の上下関係を重視するもの）が今でも新鮮さをもって読むことができることは、その疑問を益々強めるものです。また、日本の民主主義批判で最近話題となっているウォルフレン著『人間を幸福にしない日本というシステム』（毎日新聞）は、読む人によって賛否両論あるとみられるが、われわれ日本人にとって刺激的な本であることは間違いのないであろう。もう一つは、われわれは一国のみで繁栄しか視野になかったといっているのではないだろうか。今日国際社会における日本を考えると、これまでわれわれがその問題について考えてこなかったことに気づかされるのである。

今日われわれは、そのツケを払わなければならないとともに、これまでの日本経済の枠組みなり、あり方を根底から見直さなければならぬであろう。

私は、1960年代の初頭に経済学を学びはじめて今日に至っています。今日ほど経済学を学ぶ視点を振り返ってみて、それが問われる時代はないのではないかと思う。

「内容は自由」

今井 勝行

「小人、閑にして不善をなす」という。ひまな人種の代表といえればかつては学生であったが、その学生も今はひまがあればアルバイトに精を出しているのだから、有り余る時間をもてあます人は、現今、ほとんどいないと思う。従って、この諺も最早、消滅しつつあるようだ。自由に何を書いてもいいと言われると、非常に書き難いのは、有り余る時間をもてあますのにやや似た面がある。以前いた大学で、ある学生が弁論大会で自由について雄弁をふ

る一等になった。その大会の募集案内には、「演題；自由」となっていたのである。当人は自由について論ずるものと思ひ込んだのであるが、後で分かったのは、自由に演題を選んでもいいというのが主催者側の意向だったそうであった。今回の原稿依頼要領には、「内容；自由」とあったので、ふとこのことを思い出した。

私が生まれ、育ったのは人口一万人余りの北陸の町である。町には小さな図書館があり、実家はその直ぐ近くにあった。子供の頃からその図書館へよく行ったと言えば読書好きのように取られるが、当時はそれ以外に行く所が全く無かっただけのことである。読んだ本などは殆ど覚えていないが、はっきりと記憶にあるのは当時の図書館では、本は全て網を張った戸棚とその奥の書架に収蔵されていて、網を閲覧室側に向けて戸棚で仕切られていたことである。従って、読みたい本は網に指を突っ込み奥の方へ押しやって係員に出して貰うか、戸棚の奥の本はカードを探し、出して貰うかしなければならなかった。いわゆる、閉架式というやり方で今にして思えば極めて不便で不自由な閲覧方式であったわけである。今ではどこの図書館も自由に本を取りだし選べる開架式が当たり前となっている。勿論、わが古里の図書館も新しい立派な開架式に変わっている。図書館についてはこのような原体験があるので、今の自由な開架式は非常に便利で利用しやすくなっていると思うが、いつ頃から一般的になったのであろうかと思うことがある。経済発展と共に、衣食足って礼節を知った公德心の向上のせい、本の出版数が爆発的に増えたため、以前のように本を貴重なものと思わなくなったせい、単に利用者が増え、閉架式では対処できなくなっただけなのか、あるいは、外国では一般的な方式であったため、導入された結果なのだろうか。古い映画で、図書館司書が求めに応じて奥の書庫から本を抱えて持ってきて、カウンターで渡す場面があったように記憶している。外国でも開架式はそう古くからあった方式ではないように思われる。

戸棚の中の本が時にはかなり後ろにあり、相当、指を突っ込まないと本に届かず、かな

り指の痛い思いをしたことを思い出す。やはり、自由な開架式はいい。

ある種の職業については「自由業」という呼び方をすることがある。作家、芸術家、芸能人などや、昨今ではフリーターといった人達が当てはまるようである。おそらく、会社や上司に縛られているというイメージの濃いサラリーマンに対比して使われているのであろう。しかし、これらの職業の人は本当に自由なのであろうか。サラリーマンのように、直接、束縛する会社や上司は居なくても、サラリーマンとは異なった束縛を受けているに違いない。どんな職業の人でも社会生活を営む以上、諸々な束縛を受け、文字通りの自由業などある筈が無いとっていいだろう。ただ、その束縛が個人の恣意のままに、時には権力者の単なる私利私欲のために強制される場合、その束縛は社会全体の利益につながるということになり、個人の自由を著しく束縛したという結果のみを残すことになろう。生きる自由と権利をも束縛し、侵害することも有り得るので重大である。収入のいい自由業が現在の若者の理想のようである。医学部にいた頃、学生に「なぜ、医学部へ来たか」と訊ねたところ、「医師は自由業だから」と答えた学生が何人かいたのに驚いたことがある。医師は絶対の自由業であると、錯覚し、多数の人命を失わせ、なおかつその非を認めない医師の言動が注目と非難を浴びていることを思い出せば、その捉え方の問題点は明らかであろう。逆説的に言えば、自由であればあるほど、強く自らを律する不自由を求められると言うべきだろうか。大学教授の中にも、そのような錯覚をして若い人を苦しめているのを見聞してきた。他山の石としたい。

自由業に近い言葉に「自由人」がある。自由人となれば、近頃は直ぐ誰でもあの「寅さん」を思い浮かべるであろう。風の吹くまま、気の向くまま、全国を、最近では外国にまで旅を続けるフリーランサー寅さんが多くの日本人をとらえるのは、自由人への願望が非常に強くあるためであろう。ただ皮肉なことに、寅さんを演じた渥美清さんは年2回寅さん映画に出演するだけなのに、また、それ故に、自分だけでなく家族もマスコミから守らねば

ならず、極めて不自由な生活であったと思う。勿論、そのような状況を渥美さんが不自由と感じていたかどうかは知るよしもないが。以前、カトリック教の神父さんにお会いした時のことである。カトリックはもちろんキリスト教についても疎い私はつい失礼な質問をしてしまった。「このような職業を選ばれて不自由ではありませんか」と。神父さんの答えは、「私はこの職業を私自身でまったく自由に選んだので、完全に自由です」であった。

「どうぞ何なりとご自由に」と言われると、相手の意思、立場、都合を尊重しているように思えるが、必ずしも全てそうでもない場合もあるようだ。ご自由にといわれると逆に真意を測りかねて、むしろはっきり言って欲しいと思うことがあるのは誰しも経験することであろう。まったく飛躍するが、国のレベルでも、自由を勝ち取ったかって東欧諸国がその自由をもてあまし気味で、中には不自由な以前の頃が良かったというグループすら出現している。

津へ着て5ヶ月余り、単なる挨拶代わりなのでしょうが、「津はどうですか、三重はどう思いますか」とよく聞かれる。勿論、生活上、不自由なことはまったくない。学内でも自由にものを言っているのに、中には顰蹙をかっている向きがあるかもしれません。この街について、感じたままを自由に栄養学的に表現すると、「必須アミノ酸はすべて足りているが、何かビタミンが足りない」というのが率直なところ。どのようなビタミンが必要なのかこれからじっくり観察して行きます。

これで原稿の束縛から開放され自由となり、今晚は自由な気分でビールを呑むことにしよう。

1996.9.13

新規受入図書案内

(1996.4~1996.8)

総記 (000)

《岩波新書》

情報公開法	松井 茂記
ブナの森を楽しむ	西口 親雄
原発事故を問う	七沢 潔
風と共に去りぬのアメリカ	青木 富貴子
東洋医学	大塚 恭男
歴史の道を歩く	今谷 明
誤報	後藤 文康
ビルマ	田辺 寿夫
ユーゴスラヴィア現代史	柴 直弘
血圧の話	尾前 照雄
真贋ものがたり	三杉 隆敏
ロシア・アヴェンギャルド	亀山 郁夫
転換期の国際政治	武者小路 公秀
妖精画談	水木 しげる
アメリカの心の歌	長田 弘
神仏習合	義江 彰夫
希望のヒロシマ	平岡 敬

《岩波ブックレット》

住専問題の本質	佐高 信
沖縄は主張する	大田 昌秀
破防法とオウム真理教	滝本 太郎他著
ハンディをもつ子どもの権利	小笠 毅
憲法に男女平等起草秘話	土井 たか子他著
もんじゅ事故の行きつく先は	高木 仁三郎
いじめ 子ども110番からの発言	汐見 稔幸他著
ボランティア活動を考える	柏木 宏
24時間巡回型介護サービス	岡本 祐三
情報を市民に	朝日新聞社会部メディア班
視聴率競争	ばば こういち
TBS事件とジャーナリズム	黒田 清

マックスウェルの悪魔	都筑 卓司
パソコン統計解析ハンドブック	
I. 基礎統計編	脇本 和昌他著
II. 多変量解析編	田中 豊他著
III. 実験計画法編	〃
IV. ノンパラメトリック編	白旗 慎吾
V. 多変量分散分析線形モデル編	田中 豊他著

VI. グラフィックス編
三重県の図書館
民法講義ノート(6)
第2版 不法行為

脇本 和昌他著
清水 正明
澤井 裕他著

新しい地理情報技術
アジアと大阪
昭和前期日本都市地図集成
近代アジアアフリカ都市地図集成

久保 幸夫
大阪市立大学地理学教室
地図資料編纂会
中川 浩一

哲学(100)

保育・家族・心理臨床・福祉・看護の人間関係
坂口 哲司
思春期の心理臨床
岡村 達也他著
事例に学ぶ心理療法
河合 隼雄
青年期の人間関係
斎藤 誠一
認知心理学1 知覚と運動
乾 敏郎
" 2 記憶
高野 陽太郎
" 3 言語
大津 由紀雄
" 4 思考
市川 伸一
" 5 学習と発達
波多野 誼余夫
ジェンダーと愛
山本 哲士
意識と世界のフィロソフィー
石井 伸男
顔と表情の人間学
香原 志勢

歴史(200)

日本中世史研究事典
佐藤 和彦他著
日本中世の社会と国家
永原 慶二
国史大辞典第15巻上補遺・索引
国史大辞典編集委員会
歴史の町なみ 京都篇
西川 幸治
日本歴史大系
5 南北朝内乱と室町幕府上
井上 光貞他著
6 " " 下
7 戦国動乱と大名領国制
ノーマリゼーションの父、その生涯と思想
花村 春樹
維新政権
松尾 正人
地租改正
福島 正夫
ベトナムの世界史
古田 元夫
日中文化交流史叢書1 歴史
大庭 脩他著
西欧中世史上
佐藤 彰一他著
" 中
江川 温他著
" 下
朝治 啓三他著
ズサンナさんの架けた橋
ズサンナ ツァヘルト
敗戦前後、昭和天皇と五人の指導者
吉田 裕他著
ラプリー・ニュージーランド
井田 仁康

社会科学(300)

人権を守る人々
播磨 信義
現代軍事法制の研究
水島 朝穂
講座憲法学別巻
樋口 陽一
地方選挙
中村 宏
現代政党国家の危機と再生
本 秀紀
国民代表原理と選挙制度
和田 進
講座憲法法学3
樋口 陽一
日本国憲法論(新版)
吉田 善明
別冊法学セミナー法学入門1996
串崎 進
基礎法学講義
上田 純子他著
社会国家の憲法理論
大須賀 明
憲法フィールドノート
棟居 快行
憲法理論の50年
樋口 陽一他著
国際連合世界統計年鑑
国際連合経済社会情報政策分析総局他著
日本近代都市計画の百年
石田 頼房
歴史を生かしたまちづくり
西村 幸夫
人権
樋口 陽一
現代法の透視図
村上 淳一
日本型企业社会と女性
基礎経済科学研究所
日本型企业社会と家族
" "
技術選択と社会・企業
社会政策学会年報第40集
高橋 祐吉
日本の貧困
吉田 久一
ソーシャルワークの社会学
加茂 陽
社会福祉改革
吉川 孝順
たのしく学ぶ高齢者福祉
伊東 真理子
日本福祉年鑑95~96
日本福祉年鑑編纂委員会
児童福祉入門 第3版
宮脇 源次他著
障害者福祉論 第3版
手塚 直樹他著
子どもの環境と人権
子どもの環境を守る会
大阪発、公園SOS
都市と公園ネットワーク
都市計画 第3版
日笠 端
ともに生きる
三浦 文夫
現代家族と社会保障
社会保障研究所
新しい環境教育を創造する
水越 敏行他著
老人・障害者の心理
村井 潤一他著
老人福祉論
小笠原 祐次

ボランティア・ガイドブック	M・マグレガー他著	BC級戦争犯罪裁判5	小菅 信子他著
日本の社会福祉思想	吉田 久一	公職追放6	増田弘他著
福祉保育実習(実践編)	福祉・保育研究会	憲法制定7	岡部 史信
むら、まち、交流と地域活性化	持田 紀治	政府機関の再編8	平野 孝
介護福祉の基礎知識上	中島 紀恵子他著	国会の民主的改革9	前田 英昭
” 下	”	選挙制度の改革10	小松 浩
変わりゆく社会と社会学	二宮 哲雄他著	政党の復活とその変遷11	伊藤 悟
実践で生きる環境教育	河村 龍弐	社会福祉言論1	福祉士養成講座編集委員会
地域福祉システムを創造する	岡本 栄三他著	老人福祉論2	”
人権と議会議政	芦部 信喜	障害者福祉論3	”
現代比較憲法論(改訂版)	吉田 善明	児童福祉論4	”
メディアと情報化の社会学	井上 俊他著	社会保障論5	”
破防法でなにか悪い	奥平 康弘	公的扶助論6	”
社会福祉の基礎知識	小倉 襄二他著	地域福祉論7	”
社会福祉の歴史	高島 進	社会福祉援助技術総論8	”
家族発達のダイナミックス	正岡 貴司他著	” 各論I 9	”
家族と地域社会	岩本 由輝他著	” ” II 10	”
金融産業への警告	池尾 和人	心理学11	”
変貌する日本の金融制度	鹿野 嘉昭	社会学12	”
銀行崩壊	後藤 新一	法学13	”
福祉の思想	系賀 一雄	医学一般14	”
世界の社会保障	柴田 嘉彦	介護概論15	”
現代日本社会論	渡辺 治	改定社会福祉士養成講座別冊資料	
二大政党制と小選挙区制	柳沢 尚武		中央法規出版編集部
第1巻 法の構造変化と人間の権利	生田 勝義他著	社会的自己実現の教育	甲斐 進一
日本国憲法-資料と判例-		授業をどうする	香取 草之助
I 憲法の歴史・平和	現代憲法研究会	いじめ	前島 康男
II 基本的人権	”	教育のしごと、こども・青年論第4巻	竹内 常一
ベーシック憲法入門	山下 健次他著	日本の教育システム構造と変動	天野 郁夫
文献目録憲法論の50年1945~1995	日外アソシエーツ	世界の学校	二宮 皓
日本のメインバンクシステム	青木 昌彦他著	フレネ教育生活表現と個性化教育	佐藤 広和
近代のドイツの銀行	L. ヨーゼフ	生きる場からの女性論	浅野 富美枝
世界のマスメディア法	榎原 猛	企業中心社会の時間構造	森岡 孝二
ヨーロッパ統合の政治史	金丸 輝男	平和・国際教育論	森田 俊男
医食同僚の文化誌	高石 清和	不登校	橋爪 竹一郎
人類の良心平和の思想	森田 俊男	生活指導研究No.11	日本生活指導学会
国際援助の限界	ベルトラン・シュナイダー	” No.12	”
国連学習	森田 俊男	豊かさのなかの貧困と公的扶助	河合 幸尾
15年戦争学習資料上	安達 喜彦	コミュニタリアニズム	宇賀 博
” 下	”	生活保障論	荒木 誠之
頭と手と足で学ぶ平和・環境教材集	関根 一昭	地域福祉総合化への途	右田 紀久恵
国連システムを超えて	最上 敏樹	子どもと福祉臨床	阪野 貢他著
健康教育への招待	高橋 浩之	男女共生社会のワークシェアリング	鎌田 とし子
GHQ日本占領史		人間の発達課題と教育	R. J. ハヴィガースト
序説1	竹前 栄治他著	子どもの(暮らし)の社会史	高橋 勝他著
占領管理の体制2	高野 和基	いじめの時代の子どもたちへ	芹沢 俊介他著
物質と労務の調達3	笹本 征男	女性論のフロンティア	竹中 恵美子
人口4	黒田 俊夫他著	消費生活概論	杉田 淳子他著

区画整理のはなし
 衣生活の科学、被服材料学15章 安藤 文子他著
 衣服造形スカート、ワンピース、ブラウス

杉井 あつみ

下半身分岐形の基礎
 デザインと構成の応用

衣服の科学 牧島 邦夫
 THE NATIONAL TRUST 木原 啓吉
 アメリカの環境保護法 畠山 武道
 環境行政判例の総合的研究 畠山 武道他著
 都市をどう生きるか 宮本 憲一
 まちづくりの構想 西山 卯三
 みんなでつくるピオトープ入門 杉山 恵一

産 業 (600)

飢餓と飽食 荏開津 典生
 伊勢電・近鉄の80年 相山 満他著
 観光開発と地域振興 脇田 武光他著
 花のくらし 秋 第一出版センター
 変わる食料・農業政策 荏開津先生退官記念出版会
 米自由化の計量分析 黒柳 俊雄他著

芸 術 (700)

エアウォークでやせる 古藤 高良
 SIRLAWRENCEALMA-TADEMA
 ラッセルアッシュ
 書の古代史 東野 治之
 30代からのスポーツ&トレーニングのやり方 楠林 信正
 日本スポーツ史
 1. スポーツ前史 寒川 恒夫
 2. 近代スポーツの現代
 3. スポーツの未来

女性のライフステージからみた身体運動と健康 宮下 充正
 60歳からの健康、体力づくり 永田 晟
 発育と加齢の科学第24巻 福永 哲夫
 名宝日本の美術
 第21巻 友松・山楽 川本 桂子
 第25巻 洛中洛外図と南蛮屏風 奥平 俊六
 第26巻 大雅・応挙 河野 元昭
 第27巻 若沖・蕭白 佐藤 康宏
 第29巻 写楽・豊国 林 京平
 第30巻 北斎・広重 松本 寛

人の<かたち>人の<からだ> 東京国立文化研究所

語 学 (800)

漢語大詞典 附录・索引 漢語大詞典出版社
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 漢語大字典 1 四川辞書出版社
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8

フランス人が日本人によく聞く100の質問

福井 芳男他著
 ドイツ人が 柴田 昌治他著
 現代ドイツ文法の解説 E. ヘンチェル他著
 ドイツゲルマン文献学小事典 下宮 忠雄
 ドイツ名句事典 池内 紀他著
 詳解ドイツ大文法 橋本 文夫

文学 (900)

幸せの記憶上 ダニエル・スティール
 下
 TUGUMI 吉本 ばなな
 グリム童話 アリマ・タタール
 ねじまき鳥クロニクル 村上 春樹
 ユージュアル・サスペクツ
 クリストファー・マックアリー
 アイデアを捜せ 阿刀田 高
 愛国殺人 アガサ・クリスティ
 鳩のなかの猫
 動く指